

1. テキスト:「場所」「一」の第9段落。223頁終わりから3行目から225頁2行目まで。
2. テキスト要約

ラスクが一般的なるものを対象の方向に構成的範疇を超えて領域範疇の内に見ようとしたのと同様に、プラトンも一般的なるものを「客観的実在」すなわちアイデアと考えたが、「真にすべてのものを包む一般的なるものは、すべてのものを成立せしめる場所でなければならぬ」という考には到らなかった。此故に場所という如きものは却って非実在的と考えられ、無と考えられたのである」とプラトン批判を行い、そうしてここでも「イデア自身の直覚の底にもかかる場所がなければならぬ」と自説が述べられる。

西田は、プラトンの善のアイデアが「限定せられたもの」「特殊なるもの」であり、「相対たるを免れない」と言うのであるが、プラトンが善のアイデアという名の下で名指そうとしていたものをこのように批判することは難しいのではないか。またアイデアを対象の方向に客観的実在と見るというのいかなるものであろう。さらにプラトンの「場(コーラー)」は確かにアイデアの如き実在とはみなされなかった。アイデアの現前においては消失するものであった。その意味でここには「場所」も残らない。まさしく場所としては「無」である。西田の「真の無の場所」もそれが真に無であるならば、「場所」ということも残らないのではないかと思われるが、どうであろう。

それはともかく、西田は「直覚が於てある場所」というものを認め、かかる「場所」が「直覚其者をも包み込む」と考える。もちろんこの「場所」は「真の無の場所」である。したがって無が直覚を包む、ということである。

さらに西田は「直覚が於てあるのみならず、意志や行為も之に於てあるのである。意志や行為も意識的と考えられるのは之に由るのである」と述べる。ただしこの「意識」は「真の無の場所」としての「意識の野」の意味であることに注意しなければならない。同様に「意志」や「行為」も「最も深い意識の意義」としての「真の無の場所」から考えられている。こうした根源的な「意識する」ということがあるからこそ、我々の反省的な所謂「意識」、したがってまた意識的な意志や行為が成立するのである。

ところで通常(つまりは反省的に所謂)「意識する」ということと、「知識の対象界に映す」ということは同義に考えられる。しかし根源的な「情意の内容」は反省的な言葉で言い表すことができない。すなわち「厳密なる意味に於て知識の対象界に情意の内容を映すことはできない」。表面的には知識の内容となっても、根源的には情意の内容はどこまでも分からない。嬉しいという感情、水を飲みたいという意志一つとっても、その根源はどこまでも分からない。「厳密なる意味」とは(狭い意味)すなわち(反省的、所謂意識の立場における)という意味である。かかる「知識の対象界は何處までも限定せられた場所の意味を脱することはできない」。それ故少なくとも根源的な「情意の映される場所は、尚一層深く広い場所」でなければならない。それ故「情意の内容が意識」されるとは、それを反省的な説明の言葉にもたらずことではない。(「情意の内容が意識せられるということは、知識的に認識せられるということではない)。「最も深い意識の意義」は「真の無の場所」であり、それが「知情意に共通なる意識の野」である。ここに言われる「知」とは「概念的知識」(説明的言語による知識)ではない。それを意識するのは「所謂意識の立場」すなわち(反省)である(「概念的知識を映すものは相対的無の場所たることを免れない)。ここでの「知」は根源的な知、すなわち「所謂直覚」(=知的直観)である。そこにおいて「既に真の無の場所に立つのであるが、情意の成立する場所は更に深く広い無の場所ではなければならぬ。此故に我々の意志の根柢に何等の拘束なき無が考えられるのである」と述べられて、この段落が閉じられる。「真の無の場所」としての「意識の野」がいくつもあるわけではない。「真の無の場所」にさらに少なくとも知と情意の二層が区別されているのである。